

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	金城 典人
論文担当者	主査 若林 一郎
	副査 石原 正治
	副査 廣瀬 宗孝
学位論文名	Incidence and Prognostic Impact of Intracranial Hemorrhage after Endovascular Treatment for Acute Large Vessel Occlusion (主幹動脈閉塞患者に対する血管内治療後の頭蓋内出血の検討; RESCUE-Japan Registry 2 サブ解析)
論文審査の結果の要旨	
<p>本研究では、脳梗塞の多施設登録研究 (RESCUE-Japan Registry 2) のデータを用いて、急性期脳主幹動脈閉塞症に対して血栓回収療法 (EVT) 施行後に頭蓋内出血 (ICH) を来した症例の機能的転帰と症候性頭蓋内出血 (SICH) を来した症例の背景因子について検討した。具体的には発症後 72 時間以内に ICH を来した症例と非 ICH の症例の脳梗塞発症 90 日後の転帰良好 (mRS 0-2) の割合を比較した。また、神経学的重症度評価スケール (National Institutes of Health Stroke Score) において発症時より 4 点以上の増悪を来したものを SICH 群と定義し、増悪のなかった無症候性頭蓋内出血 (AICH) 群との間で転帰および背景因子を比較検討した。EVT 施行例 1281 例の中で、333 例 (26.0%) に施行後 24 時間以内に ICH が発生し (ICH 群)、90 日後に転帰良好の割合は ICH 群で 24.0% と非 ICH 群の 47.8% に比べて有意に低かった。また、90 日以内の死亡は ICH 群で 9.6%、非 ICH 群で 8.4% であり、両群間に有意差はなかった。非 ICH 群に比べて ICH 群では EVT 開始から再開通までの時間が 35 分未満の患者の割合が有意に少なく (18.5% vs. 24.6%)、到着時の血糖値が有意に高かった (中央値 136 mg/dl vs. 125 mg/dl)。ICH 例の中に SICH は 10.8% で認め、AICH 群に比べて SICH 群では 90 日後転帰良好の割合は有意に低く (8.3% vs. 25.9%)、死亡率は有意に高かった (30.6% vs. 7.1%)。また、AICH 群と比較して SICH 群では周術期のエダラボン投与の割合が有意に低かった (61.1% vs. 80.1%)。</p> <p>本研究は急性期脳主幹動脈閉塞症に対して EVT を施行した患者の予後を検討した貴重な多施設登録研究である。そして ICH を発症した患者での機能的転帰と背景因子 (EVT 時間の短縮、周術期のエダラボン使用、入院時に高血糖がないこと) を明らかにした。これらの結果は最近開発された EVT のさらなる発展に寄与する新知見であり、大きな臨床的意義があることから、本研究は学位授与に値するものと判断した。</p>	